



コンテンツ紹介

p.2 図書館の展示活動

文学部国文学科 教授 吉丸 雄哉

p.3 夏休みの暇つぶしのメソッド

国際政治経済学部国際経営学科 准教授 安井 繁宏

p.4 神保町～神田文学散歩

p.6 日本のデジタルアーカイブを探そう ジャパンサーチ JAPAN SEARCH

p.7 本学所蔵資料紹介 三島中洲書幅 作家のおやつ巡り⑭

p.8

本学教職員著書紹介

『南方抑留：

日本軍兵士、もう一つの悲劇』

文学部歴史文化学科 准教授 林 英一



九段

館内企画展示
「図書館にあります！レポート作成のコツ」



柏

館内企画展示
「2026年度生涯学習講座（春）」



図書館の展示活動

文学部国文学科 教授 吉丸 雄哉

図書館は、本や資料の収集・整理・保存を行うところで、特に大学の図書館では、学生や教員の教養の涵養、学習や調査研究などを助ける役割を果たしている。難しいことは言わずとも、本が置いてあって、それを利用者が借りる場所というのが一般的なイメージだろう。

最近では、情報支援の拠点にもなっており、大学の図書館が契約している国内外の電子ジャーナルやオンラインデータベースを教員も学生も頻繁に利用している。これらは近年の図書館が実体のある本や雑誌を利用する場だけではないことを示している。

このように現代の図書館において実体のないものを扱う傾向は強くなっているのだが、同時に現代の図書館において様々な展示が頻繁に行われていることは、やはり本あってこそその図書館と思わざるを得ない。私は忍者について研究しているので、以前忍者をテーマにした企画展示が全国の公立図書館で開催される頻度を調べたことがあり、1年間に約2.5箇所ですべての展示が行われていることがわかった。一般貸し出し用の図書をつかったものがほとんどだが、なかには貴重な和古書や古文書を展示した博物館ばりの本格的なものもある。

かくいう私も大学の図書館や公立図書館で展示の企画・監修をしたことがある。私は文学部の出身だが図書館司書や学芸員の資格は持っていない。だが、日本の古典文学、特に近世文学の研究者なので、古典籍にはまあまあ詳しい。前任校の三重大大学にいたときに、図書館から予算をもらって、未整理だった和古書1100点ほどの整理を行った。学生や中京大学の中川豊先生と一緒に10年ほどかけて、離任までにすべての書誌をとって図書館に渡し、その中の70点ほどは国文学研究資料館の国書データベースで画像公開されている。

整理作業の途中、予算をつけてもらっているものの、成果がすぐに見えないのはバツが悪いので、年に1～2回ほど図書館の玄関ロビーを利用

し、図書館の和古書を利用して15～20点ほどの小規模な展示を行っていた。以前は三重大大学の図書館が展示記録と目録を公開してくれていたのだが、最近のホームページ改修とともになくなってしまって、現在展示の詳細は私のリサーチマップの「学術貢献活動」に保存している13点の展示目録で知ることができる。

展示目録の解題は私や学生が書いたものだが、表紙の作成やレイアウトは館員さんがやってくさって、展示パネルの作成も館員さんをお願いしていた。先に書いたとおり、図書館司書の資格も学芸員の資格もないので、何もかも試行錯誤でやっていた。

それにしても鳥なき島の蝙蝠で、三重大大学にいた頃は図書館学の長澤多代先生の授業にゲストスピーカーとして呼ばれて、資料保存の話をしたり、館内展示の指導をしたりしたのである。

さて、本題はここからである。私は2024年度から二松学舎大学に着任したが、二松学舎大学附属図書館が、図書館の三要素である「人（職員）」「資料（図書・メディア）」「施設（場所・建物）」のすべてにおいて立派でちゃんとしていることに驚いた。二松学舎大学では九段と柏の図書館でそれぞれ年に5回ほど館内企画展示が行われているほか、柏では法人資料室、九段では大学資料展示室を使った展示が行われている。二松学舎大学は伝統があるため蔵書が多く、また館蔵の古典籍に優品が多い。大学資料展示室では、いつもの平常展のほか、企画展示が1年に4回も開催されている。年に1、2回の展示を青息吐息でやっていた身にとっては驚くべきことである。もとより無料で学外者にも公開されている。

図書館は本を借りるところ、博物館・美術館が展示を見るところ、といった意識が強いかもしれないが、こうした図書館の展示にも目を向けて欲しい。私が二松学舎大学に来てから、これらの展示でいろいろな発見があった。皆さんにもきっとあるとお伝えしておく。

夏休みの暇つぶしのメソッド

国際政治経済学部国際経営学科 准教授 安井 繁宏

今年の夏も猛暑になりそうです。夏休みといえば旅行が定番の過ごし方の一つでしたが、これからは屋内でのんびりするのが良いでしょう。とはいうものの一日中部屋でゴロゴロと寝転がって動画を見たりゲームをしたりするだけではすぐ飽きそうなので、ゆっくりと時間を過ごす方法として本を読むことをおすすめしたいと思います。

私はたくさん本があると楽しい気分になります。反対に本が無いと不安になるので、家の中では手の届く範囲に何らかの本を置いています。すぐに読めるように本が散らばっていると安心感があります。本と共に生活するような習慣は、あまり本を読まない人には理解できないかもしれません。皆さんの中には、授業の課題で仕方なく読んでいる人や、それこそ全く本を読まない人もいるでしょう。そのような人は、一度、気の赴くままに図書館や書店で本を手にとってみてはいかがでしょうか？自分の直感で選ぶことが大事です。

と、あたかも自分がちょっとした読書家であるかのように話をしてしまいましたが、本当は自慢するほど大量の本を読んできたというわけではありません。しかし、小さな書棚の本の表紙を眺めるだけでも持ち主の個性が少し見えてくるような気がして、皆さんも読書にちょっと興味が湧くかもしれません。そんな訳で、私の記憶の棚からいくつか本を選んで紹介したいと思います。

小学生の頃は那須正幹の児童文学「ズッコケ三人組」シリーズをよく読みました。随所に社会ネタや科学ネタが織り込まれており、私の芽生え始めた知的好奇心が強く掴まれました。中学生や高校生の頃は、自然科学や工学の本は好きでしたが文学の本を読んだ憶えははっきりしません。それでも大学生の頃に妹尾河童の自伝小説『少年H』は読みました。上下巻ある分厚い本を徹夜で読み切ったことは今でも覚えています。しかし、それ以降は小説を読んでいません。

じつは、私は長い小説を読むことが苦手なので

す。登場人物が誰だったか途中で忘れるし、話の流れが複雑で整理できないし、結局作者は何を言いたいのだろうと考え始めてしまって、余韻を味わうことができないのです。文学的素養の乏しい私ですが、詩のように短く簡潔に表現するような形式は好きです。とくに谷川俊太郎のような透明で構成がわかりやすい詩が私の好みです。手元にある詩集として『二十億光年の孤独』、『うつむく青年』、『定義』などがあります。もしこれから読んでみたいという人がいれば、本の装丁がシンプルな『谷川俊太郎詩選集』（全4冊、集英社文庫、2005年～2016年）がおすすめです。詩の世界は広大無辺です。いつかは、西脇順三郎や吉増剛造など、近現代詩の頂点を仰ぐような詩も理解したいところです。

でも、いまだき、詩とか悠長なことをいっている場合ではなさそうです。AIの進化によって人の存在感がぼやけていく時代です。そんなときこそ、「人間とは何か？」や「世界とは何か？」などといった哲学的な問題を真正面から考える必要があるでしょう。とはいえ哲学というと難しそうで自分には無理という人が多いのではないのでしょうか。さすがにアリストテレスやカントのような大哲学者の著作は難解すぎますが、その入り口付近を散歩するだけでも考えるきっかけになるかもしれません。そこで、ヒントになりそうな本として、中島義道の『哲学の教科書』（講談社学術文庫、2001年）を挙げたいと思います。この本は、疑うことを通した思考のガイドになるはずですが、もしかして、人間にとって大切なことは、AIが見過すような、道端に落ちている些細なものだったりするのかもしれないですね。

読んできた本を見直すと過去の自分が掘り返されるような気がします。皆さんも、夏休みの暇つぶしに、なんとなく本を手にとったり、難しそうな本に挑戦したりしてみتهいかがでしょうか？涼しい部屋でリラックスしながら、旅行に行ったり遊んだりするのと同じかそれ以上に心に残る思い出になるかもしれませんよ。

神保町～神田文学散歩

今号は、神保町駅から御茶ノ水を通して神田に向かって歩いてみました。

神保町交差点からすぐの路地裏に入ると、1955年創業の老舗喫茶「さぼうる」①があります。異国情緒溢れる入口が特徴的なこの店は、遠藤周作（1923～1996）が通っていました。路地の先にはスペイン語で“レンガ”を意味する店名を掲げる「ラドリオ」②があります。ウィナー・コーヒーを日本で最初に出した喫茶店で、草野新平（1903～1988）や埴谷雄高（1909～1997）などに愛されたお店です。

すずらん通りを進むと、1931年創業の天麩羅店「はちまき」③があります。日本探偵小説の父である江戸川乱歩（1894～1965）が長年通った店として知られ、入口横には「東京作家クラブ例会」の写真が飾られています。乱歩のほかにも、井伏鱒二（1898～1993）や吉川英治（1892～1962）など多くの作家が常連でした。

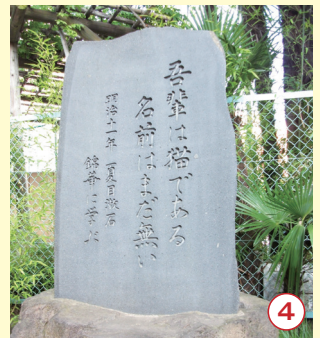
猿楽通り沿いにあるお茶の水小学校の校庭の外には、「吾輩は猫である 名前はまだ無い 明治11年 夏目漱石 錦華に学ぶ」と刻まれた石碑④があります。夏目漱石（1867～1916）は当時この地にあった錦華小学校を1878年に卒業して一ツ橋中学校（現・東京都立日比谷高等学校）に入学するも1年で中退した後、当時漢学塾だった二松学舎に入塾しました。

金華坂を登った先には「山の上ホテル」⑤の建物が残っています。このホテル周辺には多くの出版社があったことから、川端康成（1899～1972）や三島由紀夫（1925～1970）などが執筆に利用していました。老朽化により2024年2月に惜しまれつつ休業となりましたが、2027年夏頃に再開業するとのことです。

金華坂を下った先に「旧文化学院校舎入口」⑥があります。文化学院は与謝野鉄幹（1873～1935）、晶子（1878～1942）夫妻らによって1921年に創立され、高浜虚子（1874～1959）や有島生馬（1882～1974）、山田耕筰（1886～1965）といった文学・芸術・音楽など幅広い分野の一流の教師陣が教壇に立っていました。

御茶ノ水駅方面へ向かうと、駅前に「井上眼科病院」⑦があります。帝国大学文科大学英文科に入学した夏目漱石は眼病を患って井上眼科病院に通い、その待合室で背のすらっとした細面の美しい女性に初恋をしました。

余談ですが、この初恋について漱石が親友の正岡子規（1867～1902）に語っている書簡を本学附属図書館が所蔵しています。



少し先に「ニコライ堂」⑧があります。明治の名建築の一つに数えられるニコライ堂は、漱石の『それから』に登場する他、与謝野鉄幹・晶子、木下杢太郎（1885～1945）といった詩人にも詠まれています。

神田方面へ向かうと、1907年創業の老舗洋食店「松栄亭」⑨があります。漱石が好んだ「洋風かきあげ」が名物で、東京帝国大学で哲学を教えていたフォン・ケーベル博士宅を教え子の漱石が訪れた際、専属シェフをしていた初代主人が冷蔵庫にあった肉と卵を使って即興で作ったのがはじまりとのことです。

神田淡路町・須田町には、戦災を免がれた老舗飲食店が多く残っています。その中から、美食家としても有名な池波正太郎（1923～1990）が通っていた店を紹介します。まず1880年創業の「かんだやぶそば」⑩です。池波はこの店を「酒が飲みたくなるような蕎麦屋」※¹と綴っています。同じく老舗蕎麦屋の「まつや」⑪は1884年の創業で、池波は「【まつや】で出すものは何でもうまい。それでいて、蕎麦屋の本道を踏み外していない」※²と称賛しています。1830年創業のあんこう専門店「いせ源」⑫は、1923年の関東大震災で全焼しましたが1930年に再建されました。また、「鳥すきやき」が名物の「ぼたん」⑬は、証券会社で働いていた時分の池波が喧嘩になった相手に鉄鍋を投げつけたエピソードが残っています。「まつや」「いせ源」「ぼたん」の3店舗は東京都選定歴史的建造物に選ばれていますので、見て歩くだけでも楽しめます。

なお、神保町では毎年10月下旬～11月上旬に「神田古本まつり」⑭が開催されていますので、その時期にも是非訪れてみてください。

※1『食卓の情景』池波正太郎著 新潮社 2003年刊

※2『むかしの味』池波正太郎著 新潮社 2008年刊



日本のデジタルアーカイブを探そう

ジャパン

サーチ

JAPAN SEARCH

<https://jpsearch.go.jp/>



何を調べられる？

日本の図書館、博物館、美術館、研究機関などが所蔵しているコンテンツを検索することができます。

幅広い分野のデジタルアーカイブと連携しており、検索できるコンテンツは書籍、公文書、美術品、放送番組、映画など多様多彩。

インターネットで公開されているものはブラウザ上で閲覧もできます。

「デジタルアーカイブ」ってなに？

博物館、美術館、研究機関などが所蔵資料を電子化して管理・公開しているシステムです。

資料の探し方

- A キーワードで横断検索**
テキストボックスに入力したキーワードで、連携しているすべてのデジタルアーカイブを横断検索します。
- B 画像 AI 検索**
デジタルアーカイブのうち、キーワードに合致する画像を横断検索します。単語だけでなく短文を入力してもOK。
- C 絞り込み機能でコンテンツの条件を指定する**
「カテゴリ（文書、画像、動画など）」や「年代」などを絞り込むことができます。また、「画像から探す」ボタンから手持ちの画像データをアップロードして、似た画像を探すこともできます。
- D ギャラリー**
季節や歴史上の人物、動物、植物などのテーマに沿ってコンテンツを集めたコーナーです。

“やってみた” 動画で使い方を見てみよう

JAPAN SEARCH 公式チャンネル

<https://www.youtube.com/@japansearch2673>



基本的な使い方の解説や、調べたことを活用して楽しむコンテンツ「ジャパンサーチでやってみた！」などを配信しています。

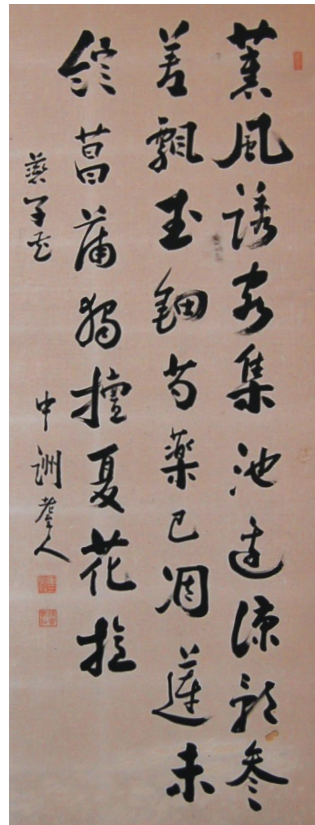


画像はすべて「JAPAN SEARCH」「JAPAN SEARCH 公式チャンネル」より

本学所蔵資料紹介

三島中洲書幅 燕子花

三島中洲（一八三〇～一九一九）…本学創立者。
明治十（一八七七）年六月大審院判事を退職、同年十月漢学塾二松学舎を設立。明治二十九（一八九六）年東宮侍講、明治四十五（一九一二）年新帝（大正天皇）の侍講となる。大正四（一九一五）年宮中顧問官に任じられ、一等官に叙せられた。



薰風誘客集池邊

薰風 客を誘ひて 池辺に集はしむ

涼影参差飄玉鈿

涼影参差として 玉鈿を飄す

芍薬已凋蓮未綻

芍薬已に凋みて 蓮未だ綻びず

菖蒲獨擅夏花權

菖蒲 独り夏花の権を擅にす

穏やかな初夏の風が、見物客を池のほとりへといざなう。カキツバタの涼しげな姿が高く低くならんで、玉でできたかんざしのような花を揺らしている。シャクヤクの花はすでにしぼみ、ハスの花はまだ咲かないこの時節、カキツバタの花だけが夏の花の中で権勢を独り占めするかのようには咲き誇っている。

（石川忠久編『三島中洲詩全釈』第五巻より）

作家のおやつ巡り⑭

池波正太郎（1923～1990）が、「戦前の東京の汁粉屋の面影が名残をとどめている」※と表現しているのが神田須田町にある1930年創業の「甘味処竹むら」です。

メニューのなかでも栗ぜんざいは「香ばしく蒸しあげた栗となめらかに練りあげた餡のコンビネーションは依然、私の舌をたのませてくれる」※と食通で知られる池波を魅了し、酒後の甘味としてもたまらないと推しています。

「竹むら」のもうひとつのお勧めは「揚げまんじゅう」です。サクサクとした衣ともっちりとしたまんじゅうの相性は抜群で、甘さ控えめのあんこが詰まっています。池波は家族ではなく、「白粉の匂いのする生きものの口」※に入れるためにお土産に包んでもらっていたそうです。

「竹むら」も東京都選定歴史的建造物に選ばれているので、風情のある木造建築でタイムスリップしたような気分になりながら甘味を食すことができます。

場所は P.5 の地図で確認してください。



※『散歩のとき何か食べたくなくて』池波正太郎著 新潮社 2003 年刊

本学教職員著書紹介

『南方抑留： 日本軍兵士、もう一つの悲劇』

林 英一 著

(新潮社、2025 年 7 月刊行)

四六変型判 236 ページ 1,650 円＋税

ISBN 978-4-10-603933-1



「やられたらやり返す、倍返しだ！」は、2013 年に流行ったドラマの名台詞ですが、いつの時代も報復の応酬は憎しみを連鎖させ、争いの後始末を困難にします。

その一例として、本書は、第二次世界大戦前まで欧米の植民地だった東南アジアや南太平洋を占領した旧日本軍兵士たちが、敗戦後に連合軍によって抑留された実態に迫りました。

ソ連軍によって日本兵が北方に連行された「シベリア抑留」については、舞鶴引揚記念館所蔵品がユネスコ世界記憶遺産に登録され、辺見じゅん原作、瀬々敬久監督の映画『ラーゲリより愛を込めて』の公開などで広く知られるようになりましたが、英米蘭豪軍による南方抑留はまだ研究が少なく、世間の認知度も低いのが現状です。

その原因の一つに、南方では日本人は抑留の被害者であると同時に占領の加害者でもあったことが挙げられます。占領中に日本軍は連合軍捕虜を虐待したことで、戦後に戦争犯罪を厳しく問われましたが、その負い目もあって、南方抑留はこれまで公に語られてきませんでした。

また、インドネシアでは英蘭軍とインドネシア軍の戦闘に巻き込まれ、シンガポール、マレーシア、ミャンマーでは英軍により過酷な労働や無人島への移動を強いられ、フィリピンでは米軍の管理が行き届いて上下関係が崩れるなど、地域差が大きくて語りにくいという事情もあります。

本書では、連合軍の没収を免れて運よく日本に持ち帰られた日記を手がかりに、このような謎多き複雑な歴史を地域横断的に描き出してみたいのですが、研究のきっかけとなったのは学生時代の元抑留者との出会いでした。

大庭定男元陸軍主計中尉は、「ジャワで最悪」と呼ばれたタンジュン・プリオク港の作業隊にいた方で、禪一貫での労働の日々でも、祖国再建を見据えて学問に励んでいました。帰国後、かつて自らを抑留した英国に渡り、元日本語学校と交流しながら日英親善に努めました。彼にとって南方抑留は、戦前と戦後の結節点であり、戦後日本にとっても原点となる隠れた歴史的経験でした。

本書が、現在世界で起きている戦争が終わった後の和解を考える一助となれば幸いです。

文学部歴史文化学科 准教授 林 英一

編集後記

「季報」125 号をお届けします。

今回は教員 2 名の図書館や夏休みにまつわるお話を紹介しました。

夏に図書館で本を借りたとき、バッグの中で「本が濡れたかも！」とヒヤッとした経験はありませんか？冷たいペットボトルの結露に突然の夕立、むしむしした電車の中…。わたしの強い味方は百円ショップのジップ付きポリ袋です！安くて軽くて丈夫。スマホの水濡れ防止には定番のグッズですが、大きめサイズは本にも使えますよ。(Sh)

二松学舎大学附属図書館

季 報

第 125 号

発行日 2026 年 7 月 1 日

発 行 二松学舎大学附属図書館

(九段) 〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16

電話：03-3263-6364

(柏) 〒277-8585 千葉県柏市大井 2590

電話：04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ